

「ゲルラッハの恋人 紹介文」

岡和田晃

齋藤路恵の手になる『エクリプス・フェイズ』小説の新作、「ゲルラッハの恋人」をお届けしたい。これは作家の持ち味がうまく発揮された小品で、初期の新井素子を思わせる雰囲気もある。これまで『エクリプス・フェイズ』のシェアードワールド小説や、齋藤路恵の作品に触れたことがない方でも、気軽に楽しめる逸品となっている。存分に余韻を愉しんでいただきたい。

「ゲルラッハの恋人」が面白いのは、語り手と「恋人」の関係に、背景となっている金星のハビタット、ゲルラッハの設定がうまく融合していることだ。ゲルラッハでこそないが、伊野隆之の「ザイオン・イン・アン・オクトモーフ」(<http://prolognewave.com/archives/2029>)も、金星の浮遊都市舞台ともなっているのので、ご記憶の方も多いだろう。途中で登場するネオ・シナジストは、「エプロスタット [Role&R011] Vol.105掲載のエントリー・ミッション「進化の石板」」(<http://prolognewave.com/archives/3436>)でも、重要な役割を果たす。ぜひ「進化の石板」のシナリオも遊んでみてほしい。

「ゲルラツハの恋人」にて、語り手は難民認定証発行の窓口担当の役人、ということになっているが、この設定を切り口に、齋藤路恵による「蠅の娘」(<http://prologuwave.com/archives/2725>)と読み比べてみれば、いっそう興趣が増すだろう。齋藤路恵の第一作「Feel like making Love——about infomorph sex」(<http://prologuwave.com/archives/2094>)は、情報体の内面に焦点を当てた作品だった。

齋藤路恵はゲーム研究・実践団体「Analog Game Studies」所属。2013年には会話型RPG『ラビットホール・ドロップス^{アイ}i』のメイン・デザイナーをつとめた。同作はエテルシア・ワークショップと成人発達障害当事者団体イイトコサガシとのコラボレーション作業を経て完成に至った作品であり、ナラティブ（会話）主体のコミュニケーション・ツールに特化した作品となっている。また、SF乱学講座でジェンダーや現代美術について講演を行なうなど、旺盛な活動を続けている。